

キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」の 実態とその評価に関する調査研究

—中学校の運動部と地域スポーツクラブの橋渡しを目指して—

伊藤 栄治*

高野 進* 宮崎誠司*

山田 洋* 内田 匡輔* 吉原 さちえ*

抄録

本研究は、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」として活動している「湘南平塚北リトルシニア」を対象に、活動の実態とクラブ活動の成果に関する調査を行うこと（調査1）、また、本クラブに所属する選手の保護者と近隣の中学校の部活動指導者の意識調査を行うこと（調査2）によって、中学校の運動部と地域スポーツクラブの橋渡しを目指して、今後の地域スポーツクラブの在り方を再考するための基礎的資料を得る事を目的とした。得られた主な結果は、以下の通りである。

調査1より、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」は、大学のもつ人材や施設等の物的資産、学術、研究成果等の知的財産を有効に利用して、地域・社会貢献を視野に入れながら、有効に運営が可能であることが明らかとなった。調査2より、シニア保護者における「総合型地域スポーツクラブ」への認知度は低いものの、中学校教員は「総合型地域スポーツクラブ」の存在とその趣旨・目的を理解しており、中学校におけるクラブ活動の指導体制の現状を考慮すると、外部指導者による大学を開放型の「総合型地域スポーツクラブ」について概ね賛成であることが示唆された。今回の調査から、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」の有用性が示唆されるとともに、中学校の運動部と地域スポーツクラブの橋渡しとしての役割を担える可能性が示された。

本研究の調査1および調査2を通じて得られた結果はその発信により、中学校の運動部、および地域スポーツクラブの在り方、その関係について、民・官・学、ひいては世の中全体、国民全体で考える礎を築くことができると考える。本研究結果は、次回「スポーツ振興基本計画」見直しにおける「総合型地域スポーツクラブ」設置におけるモデルケースとなる可能性をも有しており、本研究の果たす役割は大きいといえる。

キーワード：野球，リトルシニアリーグ，体力測定，スポーツ振興基本計画，
スポーツマネジメント

* 東海大学 体育学部 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

Research about " Comprehensive Sport Clubs" which Opened the University Campus

—For the Cooperation of the Club Activities in the Junior High School and
the Comprehensive Sport Clubs—

Eiji Ito *
Susumu Takano* Seiji Miyazaki*
Hiroshi Yamada* Kyosuke Uchida * Sachie Yoshihara*

Abstract

We examined "The Shonan Hiratsuka North Little Senior" that was active as "Comprehensive Sport Clubs" which Opened the University Campus. At first the activity actual situation and the result of club activities were examined (investigation 1). Then, the questionnaire survey for the parents of the player who belonged to this club and the leader of the club activities of the junior high school of the neighborhood was performed (investigation 2). Based on these findings, the purpose of this study was to obtain a finding to examine the athletic club of the junior high school and a cooperation method of "Comprehensive Sport Clubs". The obtained main results are as follows.

According to investigation 1, it was found that we could run "Comprehensive Sport Clubs" which opened the University Campus effectively. This is because a talented person, an institution, the arts and sciences, the results of research that a university has are used effectively. And they contribute to an area and the society.

According to investigation 2, in the parents of the little senior, there are few people knowing "Comprehensive Sport Clubs". The junior high school teacher understands presence of "Comprehensive Sport Clubs" and the contents, purpose. It were suggested that a junior high school teacher is agreeable in "Comprehensive Sport Clubs" which opened the University Campus by the external leader when we consider the present conditions of the club activities in the junior high school.

The finding obtained gives the nation a foundation thinking about the way of future "Comprehensive Sport Clubs". The results of this study will become the model case of the future Comprehensive Sport Clubs" setting.

Key Words : Baseball, Little Senior League, Physical Fitness Test, Sports promotion
basic plan, Sports Management

* Tokai University 4-1-1 Kitakaneme, Hiratsuka-city, Kanagawa

1. はじめに

2000年に「スポーツ振興基本計画」が策定され、「総合型地域スポーツクラブ」の設置が唱えられて以来、その設置数が増えている(文部科学省, 2015)、その実態、例えば、名称、内容、効果が広く世の中、国民全体に広まっているとは言いがたい。近年、新たに大学発「総合型地域スポーツクラブ」も設立しつつあり、一部メディア等で取り上げられているものの、その報道は極めて断片的であり、その実施においては多数の問題点も指摘されている(池田, 2010; 渡, 2012)。また、中学校の運動部の学校在続の限界および学校部活動のスポーツクラブへ地域委譲が論じられ(布施, 2007)、学校と「総合型地域スポーツクラブ」との交流が提案されつつもあるが(谷口, 2013)、実施・運用には至っていない。

我々は東海大学大学湘南キャンパスを開放した大学発総合型地域スポーツクラブ「NPO 法人東海スポーツコミュニティクラブ(TSCC)」を設立し、その事業の一環として、中学硬式野球リトルシニアリーグに所属する「湘南平塚北リトルシニア」の活動・運営を行っている。本研究では、この「湘南平塚北リトルシニア」における活動とその成果に関する事例研究の実施、およびその発信により、中学校の学校体育としてのクラブ活動、および地域のスポーツクラブの在り方を再考するための一石を投げたいと考えた。

2. 目的

本研究は、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」として活動している「湘南平塚北リトルシニア」の選手を対象に、活動の実態とクラブ活動の成果に関する調査を行うこと(調査1)、また、本クラブに所属する選手の保護者と近隣の中学校の部活動指導者の意識調査(調査2)を行うことによって、今後の地域スポーツクラブの在り方を再考するための基礎的資料を得る事を目的とする。

3. 方法

調査対象は、「NPO 法人東海スポーツコミュニティクラブ(TSCC)」中学校硬式野球チーム「湘南平塚北リトルシニア」の選手および保護者を調査対象とした。このクラブは、2014年に設立し、東海大学体育学部教員、スポーツ&レジャーマネジメント学科の学生により、キャンパスを開放し大学内の施設を利用して活動・運営を行っている。クラブには、調査対象である「湘南平塚北リトルシニア」による

「野球」の他、「ダンス」、「陸上競技」等のサブユニットがあり、各サブユニットの選手・スタッフは、相互参加・利用が出来る。すなわち、「野球」サブユニットに所属する選手は、練習計画に基づきシーズンの中に定期的に陸上トレーニングや、ダンスを行うことが可能となっている。そのため、野球以外の種目を楽しみながら、かつ野球では得られない身体経験・身体刺激を得る事ができる。これらの活動に関しては、東海大学体育学部、スポーツ医科学研究所、スポーツ教育センター等の体育・スポーツ関連部署がサポートをし、野球グラウンド、陸上競技場、室内トレーニング場等を利用して、活動を行っている。

「湘南平塚北リトルシニア」においては、公式戦に参加するために中学硬式野球リトルシニアリーグに登録する必要があり、この登録に約1年を費やしたが、設立から2年目となり一シーズンを通して公式戦にも参加し、運営も軌道に乗っていることから、活動実態・成果を調べることができる。なお、クラブスタッフ、選手、選手の保護者には、調査の趣旨・内容を説明し、文書にて同意を得た。

1) 調査1

調査1は、競技成績集計、形態・体力測定、ベースボールパフォーマンス測定、複合的・専門的トレーニングにより得られた各種能力(アビリティ)の測定等、クラブの主な活動とその成果の調査を実施した。

具体的には、以下の項目に関して、定期的に調査・測定を行い、選手にフィードバックを行うとともに、監督・コーチ・スタッフ間で情報共有、ミーティングを行い、練習・トレーニング内容等に反映・フィードバックを行った。

(1) 活動状況、競技成績

- ア. 選手スタッフ、練習形態、場所等
- イ. 公式戦の結果、選手の個人成績

(2) 形態・体力測定

- ア. 身長・体重・体脂肪率・体水分量等
- イ. 50m走・ボール投げ・立ち幅跳び・20mマルチシャトルラン・握力・長座体前屈・反復横跳び・上体起こし(文部科学省推奨の項目)
- ウ. 速投球速、ベースランニング所要時間・バットスイング速度、プロアジリティ・サイドステップ等

(3) 各種能力(アビリティ)の測定

- ア. コーディネーションアビリティ(ダンス)
- イ. バットスイングアビリティ(野球)

(4) 様々なスポーツ科学の活用

- ア. メディカルチェック・肘検診

- イ. メンタル・科学サポート・栄養指導
- (5) その他
 - ア. 付属高校における合宿
 - イ. 付属高校との連絡会議、講習

2) 調査2

調査2は本クラブに所属する選手の保護者と近隣の中学校の部活動指導者の意識調査を実施した。

湘南平塚北リトルシニアに所属する選手の保護者（シニア保護者群）と平塚・秦野地区の中学校教員（中学教員群）に質問用紙法を用いてアンケート調査を実施した。調査期間は2016年12月18日（日）から2017年1月12日（木）であった。

シニア保護者群には、アンケート用紙を直接配付し、直接回収した。配付数は50枚、回収数は31枚で、回収率62%であった。中学教員群は郵送で配付、郵送で回収を行い、配付数は48枚、回収数は33枚、回収率68.8%であった。なお、分析にはEXCELL2016(マイクロソフト社)を用いてカイ二乗検定を行った。有意水準は5%未満、及び1%未満とする。

4. 結果及び考察

1) 調査1の結果

調査1の主な結果は以下の通りである。

(1) 活動状況、競技成績および形態・体力測定

ア. 選手スタッフ、練習形態、場所等

2016年度の選手は、3年生17名、2年生20名15名の計52名、コーチ10名（大学教員1名、学生9名）、その他スタッフ7名（大学教員1名、学生2名）であり、神奈川県にある「リトルシニアリーグ」に登録しているチームとして平均的な規模であった。

通常の練習は週3回（土・日・水）で野球、陸上トレーニング、各種トレーニングを行い、活動場所は、東海大学湘南キャンパス内の球グラウンド、陸上競技場、室内トレーニング場であった。

大学内における「湘南平塚北リトルシニア」の位置づけを図1に示す。

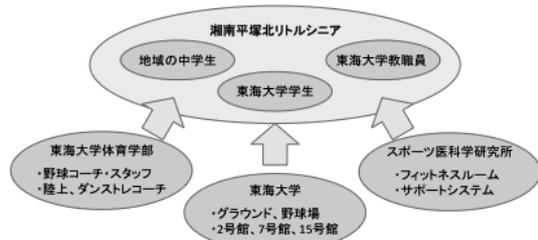


図1 大学内における「湘南平塚北リトルシニア」の位置づけ

活動の基盤となっている東海大学は、13の付属高校を有しており、当シニアリーグと付属高校の連携も特徴のひとつとなっている。例えば、定期的に、付属高校における合同練習や合宿、付属高校との連絡会議や講習を行っている。学生の“活動の場”としての湘南平塚北リトルシニアを図2に示す。

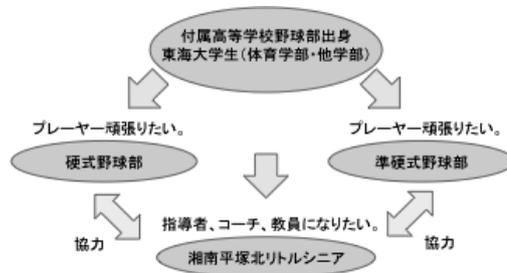


図2 学生の“活動の場”としての湘南平塚北リトルシニア

このように、本活動は、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」としての体裁を十分に整えているといえる。

イ. 公式戦の結果、選手の個人成績

公式戦の成績は、一期生（2015年度3年生メイン）が公式戦に初参加をし、二期生（2016年度3年生メイン）が二年生大会ベスト16、秋期大会ベスト16となり、着実に力をつけた。現在、三期生・四期生（五期生の一部）が活動しており、今後の躍進が期待出来る。

(2) 形態・体力測定

選手の形態に関しては、身長・体重・体脂肪率・体水分量等を、体力に関しては、50m走・ボール投げ・立ち幅跳び・20mマルチシャトルラン・握力・長座体前屈・反復横跳び・上体起こし（文部科学省推奨の項目）を定期的に測定し、選手にフィードバックしている。また、ベースボールパフォーマンスとして、速投球速、ベースランニング所要時間・バットスイング速度、プロアジリティ・サイドステップ等を測定している。

図3および4に、体力測定値の一部（50m走と速投球速）を示す。着実に能力が向上している様子

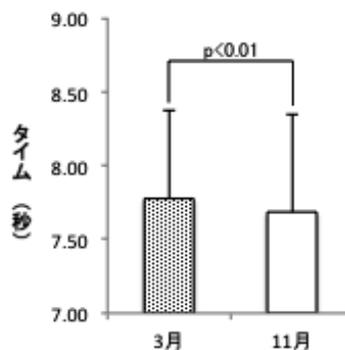


図3 50m走タイムの経年変化

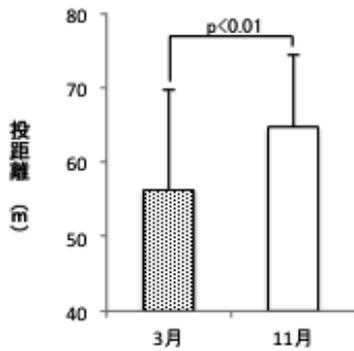


図4 遠投距離の経年化

がわかる。

(3) 各種能力 (アビリティ) の測定

本活動において獲得を期待している各種能力 (アビリティ) の評価を行うために、コーディネーションアビリティ (ダンス)、およびバットスイングアビリティ (野球) の測定を実施した。

コーディネーションアビリティ (ダンス) の評価として、ダンストレーニングが身体操作能 (身体回転動作操作能) に与える効果について検討した。1年生選手 19 名のジャズダンスのピルエットターン、クロスオーバーターンを対象に、20 分間の練習をさせ、その前後で頭頂の軌跡、動作時間等を比較した。図 5 は、バイオメカニクス的分析により得られた経験者によるピルエットターンの回転軌跡を示している。経験者の軌跡は、ほぼ円形を描いており、

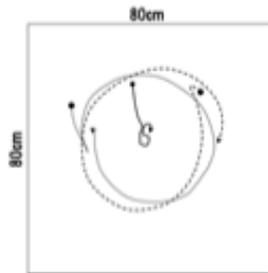


図5 経験者によるピルエットターンの回転軌跡

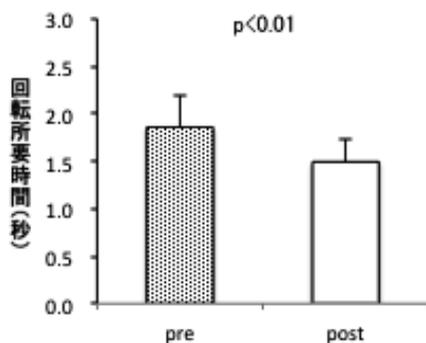


図6 練習前後における回転所要時間の比較 (クロスオーバーターン)

きれいに回転している様子がわかる。図 6 は、クロスオーバーターンにおける回転所要時間の練習前後での比較を示している。統計処理 (T 検定) の結果、20 分間の練習により、回転所要時間が有意に短縮し ($p < 0.01$)、回転が上達している様子がわかる。これらの能力は、フィールディング等において応用出来ると期待される。

また、バットスイングアビリティ (野球) の測定として、「傾斜板」を用いた打撃練習の効果についても検討した。6 名の選手を対象に、トレーニング測定として軸足側に斜面台を設置した状態で 10 球のティーバッティングをさせ (図 7)、その前後にティーバッティングを行い、そのスイングアビリティを比較した。映像解析により算出した腰部軸角度においては、統計処理 (T 検定) の結果、トレーニング測定の前後に有意差が見られ ($p < 0.05$)、インパクト時において下肢の開きを抑えることができた (図 8)。今回の介入実験により、中学生野球選手への打撃練習時の斜面台利用の有効性が示唆された。このことから、大学と地域スポーツクラブの連携により、科学的根拠に基づいた指導がより高いレベルで行うことができるということがわかった。



通常打撃 斜面台トレーニング

図7 傾斜板を用いた打撃

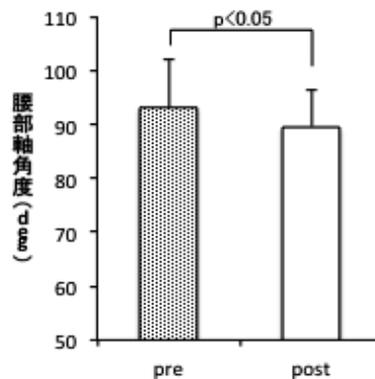


図8 腰部軸角度の試技前後での比較

(4) 様々なスポーツ科学の活用

本活動は、スポーツ医科学研究所の東海大学スポーツサポートシステム (トレーニング・メディカ

ル・メンタル・科学サポート・栄養部門) に支援を受け、サポート研究会より学生スタッフを派遣してもらい、最新のスポーツ科学を導入している。

メディカル部門所属するコーチは、随時メディカルチェックを行っている。また、怪我をしている選手のリハビリテーション、ケア等も行っている。また、メディカル部門に所属するチームドクター(東海大学体育学部教員)により、肘検診等も定期的に行っている(図9)。これにより、成長期の野球選手に頻繁にみられる「野球肘」等の障害を早期に発見し、適切な休息やリハビリメニュー等を提供することができる。この活動は、近隣のリトルリーグ、シニアリーグに所属するチームにも実施しており、地域・社会貢献の役割も担っている。

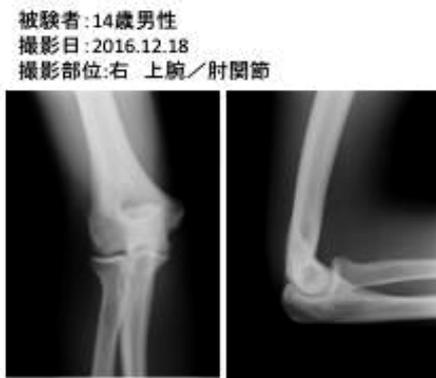


図9 肘関節におけるレントゲン画像の一例

その他、メンタルトレーニング、科学サポート、栄養指導等も随時行っており、様々なスポーツ科学の理論が実践と結びついているといえる。

(5) ワークブックによるフィードバック

また、これまで述べた全ての活動に関して、チェック用のワークブックを作成している。これは本研究における成果物のひとつである。選手は、このワークブックを利用することにより、本活動における理論・方法等を理解する事ができるとともに、測定等により得られた結果を効率的にフィードバックすることが可能となる。我々は、これらは、大学が有する知的財産を、地域・社会に有効に還元出来た、ひとつの証であると考えます。

これまでの調査結果をまとめると、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」は、大学のもつ人材や施設等の物的資産、学術、研究成果等の知的財産を有効に利用しつつ、有効に運営が可能であることが明らかとなった。

2) 調査2の結果

調査2は質問用紙を用いて、アンケート調査を行った。主な結果について、(1)「総合型地域スポーツクラブ」の認知度、(2) 大学による「総合型地域

スポーツクラブ」の連携・共同、(3) 地域中学校と「総合型地域スポーツクラブ」の連携・共同の観点から示す。

(1)「総合型地域スポーツクラブ」の認知度について

まず最初に、総合型地域スポーツクラブについての認知度についての質問を行った。図10に「総合型地域スポーツクラブ」の認知度を示す。シニア保護者群(n=31)において、総合型クラブという言葉を知っている人は9名(29%)、知らない人は22名(71%)であった。これに対して、中学教員群(n=33)では知っている人が28名(85%)、知らない人が5名(15%)であった(図11)。

この言葉を知っている人は、総合型クラブの趣旨や目的も理解している人がほとんど(シニア保護者群: 趣旨・目的を理解9名、理解していない22名、中学教員群: 趣旨・目的を理解26名、理解していない6名、無回答1名)であった(図12)。

次に、自分の住んでいる地域に総合型クラブがあるかどうかを聞いた。その結果、シニア保護者群では、聞いた事があるが2名(7%)、聞いたことがないが5名(16%)、わからないが24名(77%)であった。これに対して、中学教員群では13名(39%)がある、6名(18%)がない、14名(42%)がわからないと答えた。

これらの結果より、「総合型地域スポーツクラブ」の認知度、その趣旨・目的的理解に関して、教員は知っているが、保護者は知らないことがわかった。

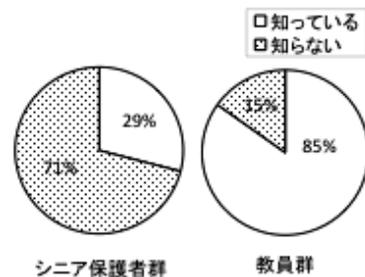


図10 「総合型地域スポーツクラブ」の認知度

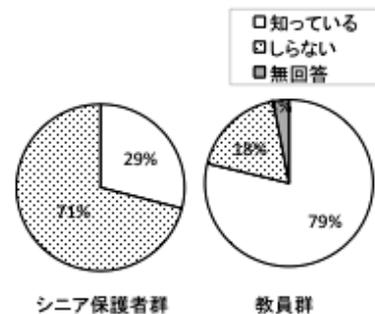


図11 「総合型地域スポーツクラブ」の趣旨・目的的理解

(2) 大学による「総合型地域スポーツクラブ」の連携・共同について

大学が「総合型地域スポーツクラブ」と連携・協同する事への意見については、シニア保護者群では、大変良いが55%、良いが39%、どちらでもないが6%であった。これに対して、教員群では、大変良いが58%、良いが39%、どちらでもないが3%であり、両者ほぼ同じ考えを有していた(図12)。

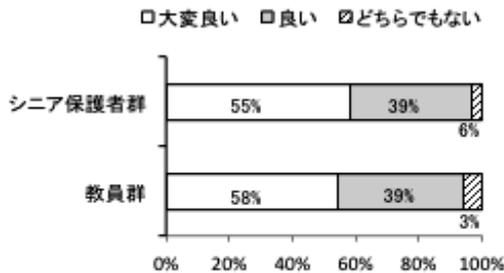


図12 大学が「総合型地域スポーツクラブ」と連携・協同する事への意見

すなわち、大学が「総合型地域スポーツクラブ」と連携・協同する事には賛成であることがわかった。

(3) 地域中学校と「総合型地域スポーツクラブ」の連携・共同について

まず、教員における指導内容の満足度について聞いたところ、大変満足0%、満足18%、どちらでもない33%、不満39%、大変不満6%、無回答3%であり、現状に不満が多いことがわかった(図13)。

次に、教員が考える外部指導者の必要性については、大変必要21%、必要36%、どちらでもない36%、必要でない3%、全く必要ない0%、無回答3%であり、外部指導者が必要であることが強く示唆された(図14)。

これに関連して、教員における大学施設の利用希望については、利用したいが73%、利用したくないが27%で、利用したいが、利用したくないを大きく上回った(図15)。

すなわち、中学校においては、現状に指導に満足しておらず、外部指導者が必要であり、大学施設を利用することも有効であると考えられる教員が多いことが明らかとなった。足立(2011)は、広島県の公立中学校105校を対象として、公立中学校の運動部活動の現状と課題の分析のためにアンケート調査を実施し、少子化により生徒の要望に応じる多様な部活動を接地できないこと、文部科学省が目指す地域スポーツクラブとの連携は、機会があれば実現したいと考えているが、実際はあまり進んでいない等の問題点を明らかにしている。また、中学校部活動がかかえる問題点について、「人的資源問題」、「少子化問題」、「物的資源問題」、「部活動への関心低下

という4つの構造があり、中でも「人的資源問題」が最重要課題であることを指摘している。

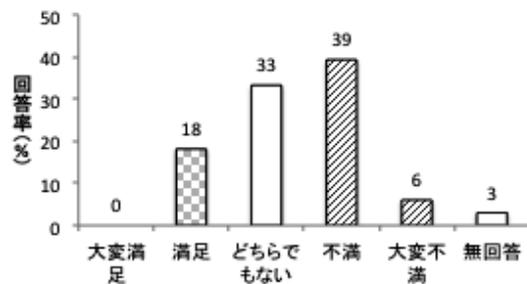


図13 教員における指導内容の満足度

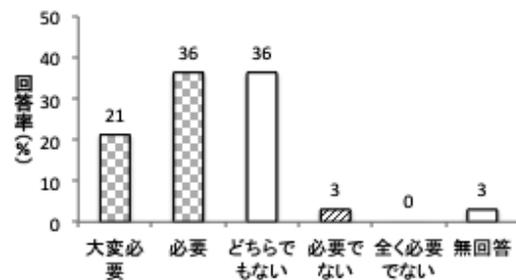


図14 教員が考える外部指導者の必要性

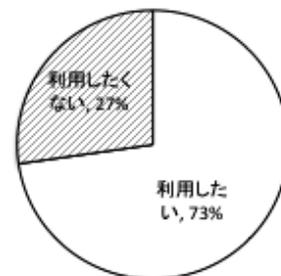


図15 教員における大学施設の利用希望

これまでの調査結果から、シニア保護者における「総合型地域スポーツクラブ」への認知度は低いものの、中学校教員は「総合型地域スポーツクラブ」の存在とその趣旨・目的を理解しており、中学校の指導体制の現状をふまえると、外部指導者による大学を開放型の「総合型地域スポーツクラブ」について概ね賛成であることが明らかとなった。足立(2011)は、中学校の部活を活性化し、競技力を高めるとともに、本来の生徒指導の役割を果たすためには、学校と地域(地域のスポーツクラブ、外部コーチ、保護者、行政含む)の連携が不可欠であり、地域スポーツクラブの整備が進む中、スポーツクラブからの指導者派遣や、共同運営等の形骸が増加することが望まれると述べている。

今回の調査から、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」の有用性が示唆されるとともに、中学校の運動部と地域スポーツクラブの橋渡しとしての役割を担える可能性が示された。

5. まとめ

本研究は、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」として活動している湘南平塚北リトルシニアの選手を対象に活動の実態とクラブ活動の成果に関する調査を行うこと（調査1）、また、本クラブに所属する選手の保護者と近隣の中学校の部活動指導者の意識調査（調査2）を行うことによって、今後の地域スポーツクラブの在り方を再考するための基礎的資料を得る事を目的とした。得られた主な結果は、以下の通りである。

調査1より、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」は、大学のもつ人材や施設等の物的資産、学術、研究成果等の知的財産を有効に利用しつつ、有効に運営が可能であることが明らかとなった。調査2より、シニア保護者における「総合型地域スポーツクラブ」への認知度は低いものの、中学校教員は「総合型地域スポーツクラブ」の存在とその趣旨・目的を理解しており、中学校の指導体制の現状をふまえると、外部指導者による大学を開放型の「総合型地域スポーツクラブ」について概ね賛成であることが示唆された。今回の調査から、キャンパス開放型大学発「総合型地域スポーツクラブ」の有用性が示唆されるとともに、中学校の運動部と地域スポーツクラブの橋渡しとしての役割を担える可能性が示された。

本研究の調査1および調査2を通じて得られた結果はその発信により、中学校の運動部、および地域スポーツクラブの在り方、その関係について、民・官・学、ひいては世の中全体、国民全体で考える礎を築くことができると考える。谷口（2013）は、学校部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築にあたっては、学校単位ではなく、教育制度全般の見直しの中で検討されることが必要であると述べている。これらをふまえ、本研究結果が、次回「スポーツ振興基本計画」見直しにおける「総合型地域スポーツクラブ」設置におけるモデルケースとなる可能性をも有しており、本研究の果たす役割は大きいといえる。

参考文献

足立浩一. 中学校運動部活動の現状と課題：スポーツ振興基本計画の検証. 福山大学経済学論集, 36(1) : 13-35, 2011.

池田孝博. 大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブの運営に関する諸問題. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 19(1) : 1-8, 2010.

谷口勇一. 学校（教師）は総合型地域スポーツクラブをどうみているのかー新たなスポーツ政策と相対する学校の「揺らぎ」に焦点化してー. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 35(2) : 137-151, 2013.

布施孝規, 友添秀則, 吉永武史. 学校教育としての運動部活動と競技会のあり方に関する一考察. 日本体育学会大会予稿集, 61 : 260, 2010.

文部科学省 online. 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議. 運動部活動の在り方に関する調査研究報告, 平成9年12月(1997) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/001/toushin/971201.htm

文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ振興課. 今後の地域スポーツ推進体制の在り方に関する有識者会議(第1回)配付資料 資料4 総合型地域スポーツクラブに関する現状と課題. 平成27年4月23日(2015)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/025/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2015/05/01/1357467_2.pdf

山田 洋, 小澤治夫, 知念嘉史, 内田匡輔, 井上実奈子, 塩崎知美, 小河原慶太, 加藤達郎. 小学校男子児童における投動作の発達に関する研究. 東海大学スポーツ医科学雑誌, 22 : 55-64, 2010. 3.

山田 洋, 長尾秀行, 小松真二, 内山秀一, 小河原慶太. 野球のピッチングにおける投法の違いが動作に与える影響. 東海大学スポーツ医科学雑誌, 26 : 45-51, 2014. 3.

渡 正. 地域スポーツクラブの存立構造に関する一考察：地域と大学のもつ資源に着目して. 徳山大学論叢, 73 : 87-102, 2012.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

